

【ポスター発表】

終末期ケアにおける IPW とソーシャルワークの機能
ー施設・在宅での看取りを支えるソーシャルワーカーに着目してー

○ 兵庫医療大学 上山崎悦代 (会員番号 5860)

IPW、終末期ケア、ソーシャルワーカー

1. 研究目的

本研究の目的は、終末期ケアにおける多職種連携・協働（=Interprofessional Work、以下 IPW）を展開するうえで必要とされる、ソーシャルワークの機能を明らかにすることである。

今日のわが国においては、看取りを含めた終末期ケアの場は多様化し、終末期ケアの質が一層問われることとなった。また、終末期というデリケートなケアの場面では、多様な価値観の導入が必要で、医療・福祉等、複数の専門職者による IPW が不可欠である。一方、医療的な課題が多くなる終末期ケアの場面では、医師・看護師などの医療職によるケアが中心となり、ソーシャルワーカー（以下、SWr）の関与が見えづらい。

複雑化かつ多様化する生活課題に対応しつつ、その人らしい人生の最期をいかに支えるかが問われる今、これに対応する SWr の役割がより一層求められていると考え、本研究に取り組んだ。

2. 研究の視点および方法

対象は、医療機関、介護老人保健施設、居宅介護支援事業所、看護小規模多機能型居宅介護に所属するソーシャルワーカー5名である。対象者は、経験年数10年前後の中堅から管理職相当の職位にあり、内4名は社会福祉士有資格者である。

方法は、グループインタビュー調査による内容分析とした。調査内容は①終末期ケアの IPW で SWr として工夫している点や課題、②IPW において他の職種から SWr に求められていること、③終末期ケアの IPW を推進する為に SWr に必要な教育・研修、の3点である。発言内容はすべて逐語録化し、質的データとしたうえで、その内容を分析した。具体的には、逐語録をもとに重要な意味を持つものを拾い、類似性が高いものをまとめ「コード」化した。それらを更に類似性の強いもの同士でまとめ「サブカテゴリー」を生成したうえで、更に類似性の高いものを集めて「カテゴリー」化する作業を繰り返した。

3. 倫理的配慮

本研究は、「日本社会福祉学会研究倫理指針」に準拠し実施した。研究対象者には、研究目的、データの処理方法等を記載した文書を事前に示し、書面にて同意を得たうえで、同意撤回の自由についても説明した。また、個人情報保護の観点から、調査中は個人情報は一切明示されないよう個々を番号で呼称し、データは厳重に保管した。

4. 研究結果

逐語録の内容分析の結果、202のコード、38のサブカテゴリーで構成する10のカテゴリーを生成した。以下、結果の一部について、カテゴリーを【 】,それに属するサブカテゴリーを< >、コードを“ ”で表記する。

コード数が最も多く抽出されたのは【家族に対して丁寧に関わる】に属するもので、終末期ケア、特に看取りに関して大きな不安を抱える家族に対し、ソーシャルワーカーが丁寧に関わりを持つ姿が確認できた。具体的には、“とにかくどうしてよいかわからないというご家族も多いので寄り添って聞き出してそれを代弁する”や、“家族の意思を確認し傾聴するという面ではソーシャルワーカーが一番適している”などの発言から、<家族の思いを代弁する>、<家族の思いを丁寧に確認する>SWrによる支援が抽出できた。次に多いのは、【医療職とは異なる立ち位置で支援する】である。“医師の話がスムーズに理解できる方ならよいけれど理解するのが難しい方も多い”ため、<医療職と本人・家族の間を調整する>ことで、本人・家族と終末期医療を結び付ける役割を担っていた。また、ソーシャルワークは“広げようと思えばいくらでも広げられる”ため、<なんでもできることが強み>となっていた。一方、“これだけ幅広く漠然としたなかではどうするか”など<何をすべきか見えづらい>状況にもあり、どこまでソーシャルワークの機能を発揮すべきか、という迷いがあった。その他には、<地域住民に働きかける>ことや<地域の社会資源や情報の引き出しを持つ>など【地域の特性を活かした支援を展開する】メゾレベルの機能も確認できた。

一方で、<医療的なことには自信がもてない>状況で、<個々でケアの力量に差がある>ことへの懸念もあった。“終末期ケアの中心になっているのはソーシャルワーカーというより施設のケアマネ”で、普段のケアは“看護師やケアワーカーが担当”する中、直接的ケアに関わる機会が他の職種（特に看護職や介護職）と比して少ない状況も影響していた。そのため、SWrには【ソーシャルワーカーとしての力量を高めるための場が必要】で、IPWの中で“自分の立ち位置を知ること”や多職種による“振り返りの事例検討会を実施”する等<ケアを振り返る場>を求めている。

5. 考察

施設・在宅を問わず、終末期ケアにおけるIPWの場でSWrが行っていたことは、医療職とは違う立ち位置で、本人、特に家族に対して丁寧に関わる支援であった。本人への直接的ケアが他の職種と比して少ない分、本人を取り巻く環境、とりわけ家族に対するサポートを細やかに実践していたと考えられる。また、医療職と他の職種、本人や家族の間を調整し、それぞれと連携することを通して、より安心した終末期ケアが展開できるよう下支えをしていた。それは、他者からは見えづらいものかもしれないが、本人・家族・社会資源などの「繋がり」を構築する機能を担っていると言えるだろう。

一方で、ソーシャルワーカーは終末期ケアを体系的に学習する機会に乏しく、不安も大きいことが示唆された。多職種の一員としてソーシャルワーク機能を一層高めていくには、現任者教育の機会を作ること、そのためのプログラム構築が今後の検討課題だと思われる。

本研究は、JSPS 科研費 16K17282 の助成を受けて実施したものです。